



Title	異言語間における動作主導入前置詞の概念研究 : スペイン語・ポルトガル語・英語を通して
Author(s)	福森, 雅史
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58811
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	福森 雅史
本籍 (国籍)	
学位の種類	博士 (言語文化学)
学位記番号	甲 第 78 号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	異言語間における動作主導入前置詞の概念研究 — スペイン語・ポルトガル語・英語を通して —
論文審査委員	主 査 教 授 伊 藤 太 吾 副 査 教 授 木 内 良 行 副 査 教 授 出 口 厚 實 副 査 教 授 郡 史 郎 副 査 教 授 林 田 雅 至

論文の内容要旨

本論文は、ポルトガル語や英語を中心とした異言語と比較し、複数言語にまたがって存在する概念的並行性に注目することで、スペイン語の受動表現における動作主導入のマーカースとして前置詞 *por* が選択された要因を明らかにすることを目的としている。

当該目的を達成するために、ここで用いる主たる研究方法是認知言語学の種々の理論によるものである。その主たる理由として、認知言語学は異言語間に渡る共通認識と「具象」から「抽象」へのメタフォリカルな概念転移という人間の持つ本質的な認知メカニズムを明らかにする学問であり、他言語との概念的並行性を論じ、更にスペイン語の受動表現における動作主導入前置詞のマーカースの選択に関する上述の要因を明らかにすることに最も適切で有り得ることが挙げられる。

本論文は、以下の1章～5章から成り立っている：

第1章

受動表現における動作主導入前置詞 *por* に関する先行研究として Morera (1988) を取り上げた。Morera (1988) では、*sema* (意義素) と呼ばれる意味素性によって前置詞 *por* の概念を規定し、それによって前置詞 *por* が動作主導入前置詞として用いられている理由を説明している。しかしながら、原義とその派生義との間に潜む概念拡張メカニズムを解明しない限り、前置詞 *por* が動作主導入前置詞として使われる理由を説明し得ないと考えられる。そこで、次に認知言語学的観点から、イメージ・スキーマを用いて前置詞 *por* の概念について言及した Lunn (1987) と Cuenca y Hilferty (1999) の先行研究を取り上げた。

ここで、語の意味変化の変遷過程を考えると、本来一つの単語には一つの「(別の意味を生む際に中心的となる) 意味」しかなく、それが時の流れと共に複数個の意味を生む役割を果たしたと捉えるのも認知言語学の主たる特徴の一つである。このことは、自然の森や山に囲まれた昔の人たちの生活環境を想像すれば、

その中心的な意味とは、目に見えるような素朴な物理的なものを指し示す意味であって、目で見ることでも手で触ることもできない抽象物を指し示す意味は後々に生まれたと考えられるのである。そして、その1つの物理的な意味からより抽象的なものへと概念拡張が起こったと考えられる。しかしながら、Morera (1988)で観察した *sema* (意義素) と呼ばれる意味素性やイメージ・スキーマのみによって語の意味拡張の動機づけを定義しようとする、そこには物理的なものを指示する意味用法と抽象的なものを指示する意味用法との区別が存在していないことになる。これでは、我々が持つ「メタファ ([英語] *metaphor*/ [スペイン語] *metáfora*)」を通して生じる概念転移メカニズムの存在が欠如していることになる。

これら先行研究の問題点を解決するための唯一の方法は、我々の大脳内に無意識的意識の内に存在する「具象」から「抽象」へ一方向的に概念が拡張するという転移メカニズムに光を当てることである。そこで、本論文では、メタフォリカルな見地から概念転移という人間の持つ本質的な認知メカニズムを観察することで、スペイン語前置詞 *por* の中核的概念と意味変化のプロセスを明らかにする。また、言語は人間の本性の産物であることから (Cf. Lakoff and Johnson (1980: 117–118)), 異言語に渡って共通する可能性が存在する。そのため、異言語間に渡る概念の並行性を観察することで、スペイン語前置詞 *por* の概念をより浮き彫りにすることも本章の主たる目的の一つである。

第2章

外界事象の知覚経験に基づく様々な空間方向性の一つとして「前方」概念を挙げることができる。歴史を遡ると、スペイン語前置詞 *por* は「前方」を原義とする古典ラテン語 *prō* に由来することから、本論では、この「前方」こそがスペイン語前置詞 *por* の原義であると設定している。他方、異言語である英語と比較すると、スペイン語前置詞 *por* と英語前置詞 *for* とは源が同じであり、各々の語には共通の意味用法が複数存在することから、両者の間には何らかの概念的並行性が存在するのではないかと推測される。

そこで、まず英語前置詞 *for* の先行研究 (Cf. 日下部 (1971)、上野 (1995)) を通して、英語 *for* における「前方」から「交換」への概念拡張メカニズムを観察する。そして、そこから導き出される概念拡張メカニズムを基に、スペイン語前置詞 *por* における「前方」から「交換」への概念拡張メカニズムを観察し、両者の間に見られる概念的並行性を明らかにする。

更に、the Me-FIRST orientation (自己中心の方向づけ) のメタファ及びそれに関わる精神病理学の観点から、プロトタイプの交換行為に基づいた「交換」と「近接」との概念的結びつきについて考察する。最終的に、原義である「前方」とその拡張概念である「交換」との中心的スキーマ概念として「近接」が位置づけられることを論じる。

第3章

スペイン語前置詞 *por* には、次の (1) に見られるような「経由」概念が存在する：

(1) José anduvo de la estación al hotel *por la universidad* ayer.

この「経由」概念を表すスペイン語前置詞 *por* は、通時的観点から見ると、古典ラテン語前置詞 *prō* ではなく「貫通」概念を表す古典ラテン語前置詞 *per* に由来しており、スペイン語 *por* は *per* を吸収していることが確認される。つまり、現代スペイン語 *por* は古典ラテン語 *prō* と *per* という異なる2つの前置詞に遡及している。また、英語では「経由」事象を「近接」概念表示語 *by* を用いた *by way of* 句を用いて表すことから、英語前置詞 *by* とスペイン語前置詞 *por* とを比較することによって、この「貫通」概念とそこから派生した「経由」概念が第2章で観察した「近接」、「前方」、「交換」各々の概念と如何に結びついているのかを明らかにする。

更に、「貫通」／「経由」概念とその他の派生意味用法（「仲介者」、「方法」、「原因」、「期間」）との概念的結びつきを明らかにすることで、それらの派生意味用法の背後には「近接」概念が潜んでいることを論じる。

第4章

英語前置詞 *by* とスペイン語前置詞 *por* とが包含する「近接」という単一の中核的概念から、「開始」／「結果」／「理由」や [*coger a la persona por el brazo*] 構文に見る「身体部位」といった様々な意味用法が生じる概念拡張メカニズムに光を当てる。そして、「具象」から「抽象」へのメタフォリカルな概念転移の見地からスペイン語前置詞 *por* と英語前置詞 *by* との概念的並行性を明らかにする。更に、そこから導き出された概念転移のメカニズムが如何にして動作主導入のマーカースとして機能する英語前置詞 *by* 及びスペイン語前置詞 *por* に反映されているのかを明らかにする。

その際、まず、Bolinger (1975) の先行研究では、受動表現の容認度の判断基準に関し、「影響」という概念が大きく関わっていることを観察する。また、Langacker (1990b) の先行研究では、受動表現はエネルギー伝達の観点から *action chain* を用いて表すことができることを観察した。これらの先行研究から、受動表現は次の(2)に示すような「エネルギー伝達」の観点から捉えられるという結論に至ることになる：

(2) 受動表現を用いる判断基準：伝達するエネルギーの大きさの程度

(a) 伝達するエネルギーが大きい

- 動作主が被動作主に影響を与えられる
- 受動表現を用いることができる

(b) 伝達するエネルギーが小さい／無い

- 動作主が被動作主に影響を与えられない
- 受動表現を用いることができない

このような理由から、以下（3）に挙げる前提条件が存在する：

- （3）最も効率的にエネルギーを伝達するためには、本来、伝達するものとされるもの、つまり動作主と被動作主との位置関係が「近接」位置に存在していなければならない。

その結果、動作主導入前置詞のマーカースとして機能する前置詞にもこの「近接」概念を内包する語が要求されることになる。このような理由から、英語では「(ぼんやりとした) 近接」表示語 *by* が、スペイン語では中核的概念として「近接」を内包する前置詞 *por* が受動表現における動作主導入のマーカースとしてそれぞれ用いられるようになることを論じる。

第5章

中世ラテン語では動作主導入のマーカースとして前置詞 *por* よりも頻繁に用いられていた前置詞 *de* を取り上げ、現代では使用頻度の多さが逆転し、前置詞 *por* の方がよく用いられているという事実に着目することで、動作主導入前置詞として選択されるための要因をより明確にすることを目的とする。

そのために、まず具象から抽象へのメタフォリカルな概念転移の見地から各々の中核的概念とその意味変化のプロセスに光を当てることで、前置詞 *de* の概念を明らかにすると同時に、英語前置詞 *of* と概念的に並行することを論じる。その上で、導き出された概念転移メカニズムが如何にして動作主導入のマーカースとして機能するスペイン語前置詞 *de* に反映されているのかを観察する。

以上1章から5章に渡る考察から、次の（3a-b）ことが結論として導き出される：

- （3） a. スペイン語前置詞 *por* は中心的スキーマとして「近接」概念を包含する。
- b. 受動表現を用いる判断基準は「伝達するエネルギーの大きさの程度」である。つまり、伝達するエネルギーが大きければ、動作主が被動作主に影響を与えることができ、受動表現を用いることが可能となる。それに対し、伝達するエネルギーが小さい、もしくは無ければ、動作主は被動作主に影響を与えられず、受動表現を用いることが不可能となる。
- c. 最も効率的にエネルギーを伝達するためには、本来は、伝達するものとされるもの、つまり動作主と被動作主との位置関係が「近接」位置に存在していなければならない。そのため、英語では「(ぼんやりとした) 近接」概念表示語 *by* が、スペイン語では中核的概念として「近接」を内包する前置詞 *por* がそれぞれ動作主導入のマーカースとして選択されることになる。
- d. 中世スペイン語では前置詞 *por* よりも *de* の方が動作主導入のマーカースとしてよく使われていた。これは、中世スペイン語では「エネルギー伝達」を表せる前置詞が他に存在していなかった中で、唯一、前置詞 *de* のみがエネルギー伝達の「起点」を表すという点でそれを表現し得

る要素を持っていたためだと考えられる。しかしながら、現在では *por* にその役割を取って代わられているのは、前置詞 *por* (<*pro*>) が *per* と結合した結果、前置詞 *por* は中核的概念として「近接」を内包するようになり、より効率的にエネルギーを伝達することができるようになった一方、前置詞 *de* には、エネルギーをより効果的に伝達するための「近接」概念が包含されていないことが原因であると考えられる。このことから、上記 (3c) の結論は妥当なものであると考えられる。

論文審査の結果の要旨

「異言語間における動作主導入前置詞の概念研究 — スペイン語・ポルトガル語・英語を通して —」は、ポルトガル語や英語を中心としたい言語と比較し、複数言語にまたがって存在する概念的平衡性に注目することで、スペイン語の受動表現における動作主導入のマーカースとして前置詞 *por* が選択される要因を明らかにしようとするものである。

第1章では、「意義素」と呼ばれる意味素性によって前置詞 *por* の概念を規定し、それによって前置詞 *por* が動作主導入前置詞として用いられているという Morera (1988) には、原義とその派生義との間に潜む概念拡張メカニズムが解明されないとし、Lunn (1987) と Cuenca y Hilferty (1999) のイメージ・スキーマを用いた前置詞 *por* の概念研究を考察した。しかし3人とも、物理的なものを指示する意味用法と抽象的なものを指示する意味用法との区別ができていないことに福森氏は気づく。その結果、メタフォリカルな見地から概念転移という人間の持つ本質的な認知メカニズムを観察することによって、スペイン語前置詞 *por* の中核的概念と意味変化のプロセスを明らかにする方法を選択した。また、言語は人間の本性の産物であることから、異言語に渡って共通する概念の平衡性を考察し、スペイン語前置詞 *por* の概念を浮き彫りにしている。

第2章：

スペイン語の前置詞 *por* はラテン語の「前方」を意味する前置詞 *PRŌ* に直接由来するのではなく、「貫通」を意味するラテン語前置詞 *PER* にも由来する。すなわち、スペイン語前置詞 *por* はラテン語前置詞 *PER* を吸収した *PRŌ* に由来するのである。そして、スペイン語前置詞 *por* と英語の前置詞 *for* は起源が同じであり、両前置詞には共通の意味用法が複数存在することから、両者の間には何らかの概念的平衡性が存在すると考えられるという考えに立脚して、*for* の「前方」から「交換」への概念拡張メカニズムを考察している。更にスペイン語前置詞 *por* における「前方」から「交換」への概念拡張メカニズムを観察し、両者の間に見られる概念的平衡性を明らかにしている。結論として、原義である「前方」とその概念拡張概念である「交換」との中心的スキーマ概念として「近接」が位置づけられると言う。

第3章：

現代スペイン語前置詞 *por* は古典ラテン語の *PRŌ* と *PER* という2つの異なる前置詞に由来することを確認し、英語では「経由」事象を「近接」概念表示語 *by* を用いた *by way of* 句を用いて表すことから、英語前置詞 *by* とスペイン語前置詞 *por* とを比較することによって、「貫通」概念と、そこから派生した「経由」概念が、第2章で考察された「近接」・「前方」・「交換」のおおの概念といかに結びついているかが考察されている。

更に、「貫通」・「経由」概念とその派生的意味用法（「仲介者」・「方法」・「原因」・「期間」）との概念的結びつきを明らかにすることによって、それらの派生的意味用法の背後には「近接」概念が潜んでいることが論じられている。

第4章：

「*coger* + 人 *por el brazo*」構文に見られる「身体部位」といった、様々な意味用法が生

じる概念拡張メカニズムに光が当てられていて、「具象」から「抽象」へのメタフォリカルな概念転移の見地から、スペイン語前置詞 *por* と英語前置詞 *by* との概念的平衡性が論じられている。そして、そこから導き出された概念転移のメカニズムが、いかにして動作主導入のマーカ―として機能する英語前置詞 *by* 及びスペイン語前置詞 *por* に反映されているか、が明らかにされている。その結果、「最も効果的にエネルギーを伝達するためには、本来伝達されるもの、つまり、動作主と被動作主との位置関係が「近接」である必要がある」という前提条件のもとに、動作主導入前置詞のマーカ―として機能する前置詞にもこの「近接」概念を内包する語が要求されるという。英語では「(ぼんやりとした) 近接」表示語 *by* が、スペイン語では中核的概念として「近接」を内包する前置詞 *por* が受動表現における動作主導入のマーカ―として用いられるようになった経緯を論じている。

第5章：

中性ラテン語では動作主導入のマーカ―として前置詞 *por* よりも頻繁に用いられていた前置詞 *de* を取り上げ、現代では使用頻度の高さが逆転して前置詞 *por* の方がより多く用いられているという事実に着目することで、動作主導入前置詞として選択されるための要因が明らかにされている。

我々の大脳内に無意識的意識の中に存在する「具象」から「抽象」へ一方的に概念が拡張するという転移メカニズムに光を当て、メタフォリカルな見地から概念転移という人間の持つ本質的な認知メカニズムを観察することによって、スペイン語前置詞 *por* の中核的概念と意味変化のプロセスを明らかにしたものである。

本論文の結論は次のようなものである：

- 1) スペイン語前置詞 *por* は中心的スキーマとして「近接」の概念を包含する。
- 2) 受動表現を用いる判断基準は「伝達するエネルギーの大きさの程度」である。つまり、伝達するエネルギーが大きければ、動作主が被動作主に影響を与えることができ、受動表現をすることが可能となる。それに対し、伝達するエネルギーが小さい、もしくは無ければ、動作主は被動作主に影響を与えられず、受動表現をすることが不可能となる。
- 3) 最も効果的にエネルギーを伝達するためには、本来は伝達するものとされるもの、つまり、動作主と被動作主との位置関係が「近接」位置に存在していなければならない。そのため英語では「(ぼんやりした) 近接」概念表示語 *by* が、スペイン語では中核的概念として「近接」を内包する前置詞 *por* が、それぞれ動作主導入のマーカ―として選択されることになる。」
- 4) 中世スペイン語では前置詞 *por* よりも *de* の方が動作主導入のマーカ―としてよく用いられていた。その理由は、中世スペイン語では「エネルギー伝達」を表すことのできる前置詞が他に存在していなく、前置詞 *de* のみが唯一エネルギー伝達の「起点」を表す得る要素を有していたからである。しかしながら現代スペイン語では、その役割は *por* に取って代わられている。その理由は、前置詞 *por* (<PRŌ) が PER と結合した結果、前置詞 *por* は中核的概念として「近接」を内包するようになり、より効率的にエネルギーを伝達することができるようになった一方、前置詞 *de* にはエネルギーをより効果的に伝達するための「近接」の概念が包含されていないことによる、という氏の結論は妥当なものであり、説得力がある。

膨大な参考文献を精読し、緻密な研究過程と研究結果は歴史言語学的にも認知言語学的にも納得のいくものである。残念ながら、誤植が散見され、論の進め方に若干強引な所も感じられ、冗漫な記述が認められるものの、論文全体としては新たな研究方向が期待される好論文である。

上記の結果、審査委員は全員一致して福森氏に博士（言語文化学）の学位を授与することに同意した。